

小さいころに出会った「恩人」

練馬区立中村中学校 二年B組 沖原 奈津子

わたしの手元には、六つのバッジがあります。そのバッジは、誰もがもらえるわけではありません。一年に一回の歯科検診で虫歯のない練馬区の児童だけが毎年一つもらえる、「よい歯バッジ」というものです。小学校の六年間きれいに歯を磨いてもらうことができた、わたしの「努力の証」です・

わたしは、人生で一度も虫歯になったことがありません。バッジをもらった、小学生のころより小さいときも、中学生の今でも、どんなにいそがしくても毎日欠かさずに念入りに磨いています。こうして磨き続けているきっかけは、ある一人の歯科衛生士さんとの出会いでした。

わたしは、幼稚園にも行ってないころ、とても怖がりでした。だから普段経験しないことをするのは怖かったです。そんなとき歯科医院に行ってとても優しい歯科衛生士さんと出会いました。かたくなに口を閉じて、歯を見せようとしなかったわたしに、「怖くないよ、痛くないよ」と笑顔で話しかけてくれました。無理やり口を開けるのではなく時間がかかってもわたしが自分から開けるのを待っていてくれました。それ以来「怖いものってあまりないのかな」と他のことも怖くなくなってきました。その歯科衛生士さんにほめてもらいたいと思い、このときから念入りに歯を磨くようになりました。歯科医院に行くのが楽しみにさえなったのです。

しかし、突然当時のわたしにはショックだった出来事が起こりました。大好きだったその歯科医院は他の県へ移転することになったのです。わたしは母と二人で花束を渡しました。歯医者さんもお世話になった歯科衛生士さんも、とても喜んでくれました。温かく力強く「ありがとう」と言われました。このときわたしは、無意識に「虫歯になったらこの方に失礼だな」と思っていたのだらうと思います。小さかったですが、歯科衛生士さんの記憶は鮮明に覚えています。

歯科衛生士さんと別れてしばらくたった今改めて、感謝することがたくさんあります。もし、口を開けようとしなかったとき口を無理やり開けられていたら、歯科医院に行くのを嫌がり、虫歯になっていたかもしれません。今よりも歯をきれいに磨いていなかったかもしれません。何より、「歯を大切にしなければ」と、今ほど深く考えていないと思います。

わたしは今後、小さいころに出会った歯科衛生士さんのような、話した相手が心を開いてくれる優しい人になりたいです。そのために、人の気持ちを考えて行動していきたいです。また、歯科衛生士さんのしてくれた、「相手が口を開けるまで待つこと」や「笑顔で話すこと」、今お世話になっている歯医者さんがしてくれている「よくできていると思ったらとことんほめること」も将来に活かしていきたいです。わたしは小学校の先生になるのが夢です。だから、こういうことができる児童から慕われる先生になりたいです。歯科衛生士さんや歯医者さんからは、人生において大事なことを学びました。児童たちには、歯が大切だということを教えて、児童たちの歯がいつまでもきれいでいられるようにしたいです。わたし自身も、大人になってもずっと、毎日欠かさず歯を磨き、あのとき出会った「恩人」に、失礼がなく喜ばれるようにしたいです。「恩人」のためにも、そして「わたし」のために、歯を磨くことは、大切であると思います。「よい歯バッジ」も、いつまでも手元においてそれを自信に変えたいです。